

第6章 異文化トレーニングの導入に関わる問題

1 現状

海外派遣が決まると、とりあえず外国語の訓練は受ける。しかし、それ以外のことについては、現地へ行ってその場で先輩から聞くか、あるいは直接現地の人から学ぶというのが、一般的であった。これは、日本に限らず、かつてアメリカにおいてもそうであった。それが、既述したように、アメリカの異文化トレーニングの普及の影響を受け、日本においても海外派遣者に対するトレーニングが行われるようになってしばらく時が立つ。かつての認識が改められたこと自体はよい方向であるが、導入に際して問題も生じている。少なくとも検討しておくべき問題は山積しているといってよいのではないかと思われる。本章では、報告をまとめる意味で、異文化トレーニングの日本への導入に関わる問題として、用語とその背景の問題と、異文化トレーニングの内容の問題として異文化のコミュニケーション能力、能力を捉えるためのフレームワーク、そしてその能力の測定法を取り上げる。¹⁾

2 用語の問題

用語、つまり呼び方について、まず次の点を明確にしておきたい。著者は米国で開発された異文化コミュニケーションの訓練 (Intercultural Communication Training) について、その歴史、理論的背景、訓練のモデル、及びミネソタ大学で実施した Intercultural Communication Workshop (ICW) の報告をそれぞれ論文で紹介した [Nishida, 1983; 西田, 1985; 西田&グディカンスト, 1986]。その際、原語の Intercultural Communication という意味を極力表そうと「文化間の人間関係トレーニング」という表現を用いた。それは、Communication という概念がコミュニケーションの領域において、情報の「伝達」と「人間関係」という二つの内容を持っているからであり [西田, 1987]、また著者がミネソタ大学で助手 (Teaching Assistant) として担当した Intercultural Communication Workshop という科目において「人間関係」という内容で使っていたからでもあった。異文化の人間関係、つまり異文化のコミュニケーショ

ンの訓練という意味で用いたのである。

一方、ここ数年の論文及び著書においては「適応訓練」という表現を用いている [西田, 1986a; 西田, 1986b]。その理由は、最近の国際人育成あるいは国際化要員育成といった領域において「適応」という表現が企業及び団体で広く用いられつつあるからである [日本在外企業協会, 1989; 海外職業訓練協会, 1990]。しかしこの表記が唯一のものではない。文献によっては「異文化交錯訓練」で「交錯」 [ハリス&モーラン, 1987]、あるいは「異文化トレーニング」 [水田, 1989]として原語を Intercultural Training としている。また前出の ICW を「異文化間コミュニケーション研究集会」 [ハリス&モーラン, 1987]として、そのまま表記しているものもある。

用語の不統一という問題と、「適応」という用語の使用についての問題が絡み合っていて混沌とした状態を呈しているように思われる。「異文化」という表記の問題は別として、米国で発達した訓練方法で、そこで用いられている原語が Intercultural Training であるから、「異文化トレーニング」とするのも筋が通っている。一方、多くの企業や団体は「適応」プログラムとしている。これには問題がある。というのは「適応」といった場合、「何」への適応のプログラムかということになり、適応そのものが必要かという議論になる。異文化の人間関係に関して「適応」という観点に問題があることについては別のところで論じたのでここでは繰り返さないが、そこで紹介したのは社会技能というアプローチであった [西田, 1990]。ここらの議論を取り入れ、日本在外企業協会の報告書にある表現を加味すれば、「国際化トレーニング」あるいは「異文化トレーニング」とするのがいいであろう。

3 異文化のコミュニケーション能力

現在広く行われている研修プログラムの目的は大きく分けて、国際業務遂行能力、語学力、異文化適応力の三つの能力の開発である [国際産業経営情報センター, 1989]。そのなかでコミュニケーション研究の領域が担当するのは異文化適応能力についてである。異文化適応能力を言い換えれば、異文化におけるコミュニケーション能力、あるいは異文化への適応能力という行動のレベルがその内容となる [Watzlawick, Beavin, & Jackson, 1967]。異文化コミュニケーション能力、あるいは異文化適応能力が定義され、訓練の目的が設定され、プログラムが構成され、そし

ではじめて訓練の効果が測定され、プログラムが評価されることになる。

最後に、アメリカで研究が進められている異文化トレーニングで開発すべき能力に関する議論を紹介し、日本での異文化トレーニングに関する議論の資料としたい。概念とフレームワークの二つに分けて紹介する。前者について著者は文献研究を行い、論文「異文化コミュニケーション能力」[西田, 1992]として発表した。その内容を、複数の研究者の用いた概念の重複を避け、コミュニケーションの観点からまとめると次の68の概念になる。

- (1) イミューディアシー... 接近・親密オリエンテーション (approach/affiliation orientation) のスキルである、親愛や他人との協調を意味しているイミューディアシー (immediacy) スキルである (initiating contact/introductions) [Benson, 1978; Coker Burgoon, 1987; Furnham & Bochner, 1982; Hawes & Kealey, 1979, 1981]。
- (2) 相互作用の管理... 相手のニーズや希望・期待に対する、正確な判断に基づく発話、発話の交代、会話の開始と会話を終止する能力を意味する相互作用の管理 (interaction management) である [Coker & Burgoon, 1987; Ruben, 1976]。
- (3) 友好的な関係の形成能力... 友好的な関係の形成能力 (ability to establish friendships) も指摘されている [Center for Research & Education, 1973]。
- (4) 意義のある対人関係を形成する能力 (ability to establish meaningful interpersonal relationships) [Hammer, 1987, 1989; Hammer, Gudykunst, & Wiseman, 1978]。
- (5) 親密な社会関係 (intimate social relations)、つまり親密な人間関係 [Furnham & Bochner, 1982]。
- (6) 文化的な相互作用 (cultural interaction)。つまり人間関係の形成や維持 [Harris, 1973]。
- (7) エクスプレッシヴネス... エクスプレッシヴネス (expressiveness) は言葉、特に言語スキルという側面の表現スキルという概念として取り上げる [Coker & Burgoon, 1987; Hautaluoma & Kaman, 1975]。
- (8) 曖昧さへの寛大さ... 曖昧さへの寛大さ (tolerance for ambiguity) である。新しい、曖昧な状況に対して最少の不快感で即座に適応する能力を意味している [Coker & Burgoon, 1987; Dodd, 1987; Gudykunst & Kim, 1984; Nishida, H. 1985; 西田ひろ子, 1988; Ruben, 1976]。

- (9) 敬意を現す能力... 現地の人々に対する敬意を現す能力 (ability to express respect to ward host country nationals) である [Hawes & Kealey, 1979; Ruben, 1976; Ruben & Kealey, 1979]。 尊敬の気持ちを現すべき状況の理解、その方法 [近藤, 1989]。
- (10-13) 社会的リラクゼーション... 社会的リラクゼーション (social relaxation) というスキルを構成する概念として、(10) 憂うつや孤独を処理する能力 (ability to deal with depression and loneliness)[Hautaluoma & Kaman, 1975]、(11) 障害に接したときの平静さや自己制御 (calm and self-control when confronted by obstacles)[Hawes & Kealey, 1979, 1981]、(12) 心理的ストレスに対処する能力 (ability to deal with psychological stress)[Hammer, 1987, 1989; Hammer, Gudykunst, & Wiseman, 1978]、(13) 不便なことに寛容になる能力 (ability to tolerate inconveniences) がある [Guthrie & Zektick, 1967]。²⁾
- (14-17) 他人指向... 相手への注目、興味、適応を意味するオルトラセントリズム (altercentrism)、言い換えれば、他人指向 (other orientation) を構成する概念には4つの能力が含まれている。(14) 感情移入 (empathy) の能力である [Dodd, 1987; Gudykunst & Kim, 1984; Hwang, Chase, & Kelly, 1980; Ruben, 1976]。(15) 相手のニーズや関心を聞くことと正確に理解すること (listening/accurate perception of others' needs and concerns)[Hawes & Kealey, 1979, 1981]。
- (16) オープンマインデドネス (open-mindedness) [Dodd, 1987; Gudykunst, Wiseman, & Hammer, 1977]。(17) アロセントリズム (allocentrism) である [Heath, 1977]。
- (18) 非評価的、記述的に相手に対応する能力... 相互作用の成功度と密接に関係している能力 (interaction posture)[Ruben, 1976]。
- (19) 知っていることは本質的に個人的であることを認識する能力 (orientation to knowledge)[Ruben, 1976]。
- (20) 問題解決の役割と対人関係形成の役割をする能力 (self-oriented role behavior)[Ruben, 1976]。
- (21) 人の考えに対する融通性 (flexibility toward ideas of others)[Hawes & Kealey, 1979]。
- (22) 人への尊敬 (思いやり) (respect of others)[Hawes & Kealey, 1979]。
- (23) 人との信頼、親愛、協力 (trust, friendliness, and cooperation with others) [Hawes & Kealey, 1979]。

- (24) 困難に直面したときの平静さと自己制御 (calm and self-control when confronted by obstacles)[Hawes & Kealey, 1979]。
- (25) 文化的相違に対する繊細さ (sensitivity to cultural differences) [Hawes & Kealey, 1979]。
- (26) 観察力...対象全体を見る姿勢。個人的特徴と文化的特徴を判断する。知覚に影響を与える文化的・個人的偏見や限界から自由になれる。真の観察と推論や仮定とを区別する [近藤, 1989]。
- (27) 行動様式の柔軟性...自分の行動様式に固執せず、新しい、異なる行動様式を取り入れる [近藤, 1989]。
- (28) 対話能力...会話能力と、言語的及び非言語的特徴も理解する [近藤, 1989]。
- (29-32) 知覚的概念...知覚的概念 (cognitive dimension) には、(29) 知覚的複雑性 (cognitive simplicity/complexity), (30) カテゴリー幅 (narrow/broad category width), (31) 知覚的融通性 (cognitive rigidity/flexibility), (32) パースペクティブ・テイキング (perspective taking) がある [Kim, 1991]。
- (33-39) 異文化調整への準備度...異文化調整への準備度 (動機的・態度的傾向) (affective dimension) には、(33) 適応的動機 (adaptive motivation), (34) 積極的対人態度 (affirmative self/other attitude), ambiguity tolerance, empathy, (35) 感情移入的動機 (empathic motivation), (36) 心理的距離 (psychological distance), (37) グループ間不安 (intergroup anxiety), (38) 自民族中心主義 (ethnocentrism), (39) 偏見 (prejudice) がある [Kim, 1991]。
- (40-49) 行動的概念...行動的概念には、(40) 行動的複雑性 (behavioral complexity), (41) 行動的フレキシビリティ (behavioral flexibility), (42) コミュニケーション調整 (communication accommodation), (43) メッセージ複雑性 (message complexity), (44) 人中心コミュニケーション (person-centered communication), (45) 対人管理 (interpersonal management), (46) 相互作用深度 (interaction involvement), (47) 非評価的相互作用姿勢 (non-judgmental interaction posture), (48) 自己中心役割行動 (self-oriented role behavior), (49) 相互作用管理 (interaction management) である [Kim, 1991]。
- (50) 接近・回避のオリエンテーション (approach-avoidance orientation)...仲間に入れるか、信用できるか、安全か、自己概念を維持できるか、といった不安 [Gudykunst, 1991]
- (51) 不安の減少と抑制... (51) マインドフルネス (mindfulness)、曖昧なものに対する

- 寛容さ (tolerance for ambiguity)[Gudykunst, 1991]
- (52) 不確実性の減少...感情移入 (empathy)、行動的フレキシビリティ (behavioral flexibility)、(52) 不確実性自体を減少させる能力 (reduction of uncertainty)[Gudykunst, 1991]
- (53) 忍耐性を有する性格...多重的思考、社会的変化への対応、曖昧な状況への対応、对人的忍耐、幅広いフレキシブルな社会的状況に対する概念的カテゴリー [Brislin, 1981]。³⁾
- (54) 性格的強靱さ...自尊心、肯定的な自己概念、誠実さ、忠誠、勇気 [Brislin, 1981]。
- (55) 人間関係...感情移入、親密さ、役割能力 [Brislin, 1981]。
- (56) 問題解決能力 [Brislin, 1981]。
- (57) 仕事指向...ゴールオリエンテッド、問題克服能力、遂行能力 [Brislin, 1981]。
- (58) ポテンシャル・フォ・ベネフィット...変化へのオープンネス、フィードバックの能力、学習動機 [Brislin, 1981]。
- (59) 知覚技能...言語及び非言語の対人調整、相手への発言の奨励、適切な対応 (co-ordinating verbal behaviour, encouraging the speaker, and giving appropriate feedback) [Argyle, 1979]。
- (60) 表出技能...感情を適切に表現している音声の表出 (speaking loudly and clearly, with the appropriate emotional tone in the voice)[Argyle, 1979]。
- (61) 会話技能...適切なタイミング、話しての交代、話題、自己開示 (appropriate timing, speaker exchanges, topics, and self-disclosure) [Argyle, 1979]
- (62) 主張技能 (standing up for one's own rights without aggression or undue passivity) [Argyle, 1979; Furnham & Bochner, 1982]。
- (63) 感情表出技能 (the expression of a full range of appropriate emotions in various situations) [Argyle, 1979]。
- (64) 不安管理 (anxiety management)(coping with social anxiety during moments of stress, such as in decision-making, or when being the focus of attention)[Argyle, 1979]。
- (65) 親密関係技能 (being able to express feelings of warmth, affection, and sexuality where appropriate)[Argyle, 1979]
- (66) 公的な人間関係...公的な人間関係、公的な場における注目に耐える能力

(formal relations/focus of attention)[Furnham & Bochner, 1982]

(67) 公的な儀式 (public rituals)[Furnham & Bochner, 1982]。

(68) 公的な場の意思決定 (public decision-making)[Furnham & Bochner, 1982]。

4 フレームワーク

続いて、異文化トレーニングで開発する能力を捉える枠組み、つまりフレームワークに関する議論を紹介する。

キム [Kim, 1991] はシステム理論の観点から異文化コミュニケーション能力 (intercultural communication competence) を捉えている。彼女はそのフレームワークの中で、(1) 文化的相違・未知性 (cultural difference/unfamiliarity)、(2) グループ間姿勢 (intergroup posture) (これは自民族中心主義 (ethnocentrism) や偏見 (prejudice) といった概念に近い)、そして(3) それに伴うストレス (the accompanying stress) を3大難関と呼んでいる。換言すれば、第一は、相手のメッセージと、その意味を知らないこと、そのため不安を経験し、行動予測ができないこと、第二は、グループアイデンティティとグループ間姿勢の相互作用によって生じる心理的距離。その原因は、グループ間姿勢はグループ内忠誠とグループ外差別を伴うものであるから。第三は、異文化遭遇にはストレスは共起するものである。

キム [Kim, 1991] の主張点は「適応性」 (adaptability) である。その定義は、

the individual's capacity to suspend or modify some of the old cultural ways, to learn and accommodate some of the new cultural ways, and to creatively find ways to manage the dynamics of cultural difference/unfamiliarity, intergroup posture, and the accompanying stress. (p. 268)

である。また、言い換えて、適応性を「the self-altering and creative capacity」 (p. 268) と表現もしている。適応性の高い者が異なる文化パターンを学習することにより、オープンになり、グループ間の姿勢や自民族中心主義、差別といった点でその度合を低くし、さらに、相違や相違による未知性、グループ間の姿勢における文化的アイデンティティといった点を低くする、という。

以上の見方に基づき、彼女はこれまでの研究を3つの次元に分類し、各々の次元を構成する概念を示している。3つの次元とは、前述の関連概念で取り上げた(1)

知覚の次元 (cognitive)、(2) 動機・態度の次元 (affective)、(3) 行動の次元 (operational or behavioral)、である。

知覚の次元 (cognitive dimension) には、知覚的複雑性 (cognitive simplicity/complexity)、カテゴリー幅 (narrow/broad category width)、知覚的融通性 (cognitive rigidity/flexibility)、パースペクティブ・テイキング (perspective taking) がある [Kim, 1991]。

動機・態度の次元 (affective dimension) には、適応的動機 (adaptive motivation)、積極的対人態度 (affirmative self/other attitude)、曖昧さへの寛大さ (ambiguity tolerance)、感情移入 (empathy)、感情移入的動機 (empathic motivation)、心理的距離 (psychological distance)、グループ間不安 (intergroup anxiety)、自民族中心主義 (ethnocentrism)、偏見 (prejudice) がある [Kim, 1991]。

行動の次元 (operational or behavioral dimension) には、行動的複雑性 (behavioral complexity)、行動的フレキシビリティ (behavioral flexibility)、コミュニケーション調整 (communication accommodation)、メッセージ複雑性 (message complexity)、人中心コミュニケーション (person-centered communication)、対人管理 (interpersonal management)、相互作用深度 (interaction involvement)、非評価的相互作用姿勢 (non-judgmental interaction posture)、自己中心役割行動 (self-oriented role behavior)、相互作用管理 (interaction management) がある [Kim, 1991]。

グディカント [Gudykunst, 1991] は不確実性の減少という概念を中心に、インプレッション (impression) という観点からコミュニケーション能力を定義している。有能 (competence) というインプレッションには、誤解を最小限にするといった場合のイフェクティブネスが多いな役割を果たす。そしてイフェクティブネス (effectiveness) という概念はアデカシー (adequacy) とサフィシェンシー (sufficiency) に大きく関係している。スータビィティがあるという意味は、コミュニケーションが適切である (appropriate) ことである。何が適切なのか (appropriateness) は3つの側面を考慮しなければならない。その3つはウィーマンとバックランド [Wiemann & Backlund, 1980] のいう (1) 言語文脈 (The verbal context, that is, making sense in terms of wording, of statements, and of topic)、(2) 人間関係文脈 (the relationship context, that is, the structuring, type and style of messages so that they are consonant with the particular relationship at hand)、(3) 環境文脈 (the environmental context, that is, the consideration of constraints imposed on message

境文脈 (the environmental context, that is, the consideration of constraints imposed on message making by the symbolic and physical environments) であるとしている。

続いてスピッツバーグとキューパック [Spitzberg & Cupach, 1984] のコミュニケーション能力の3つの構成要素を用いて異文化のコミュニケーション能力について論じている。その3つの構成要素は(1)動機 (motivation)、(2)知識 (knowledge)、(3)技能 (skills) である。

まず動機については、不安の管理であるとしている。つまり、不安が高ければ、見知らぬ人とのコミュニケーションを避けようとする。また不安を避けるということは、予測のつかない相互作用を避けるということである。それを説明する概念を接近・回避のオリエンテーション (approach-avoidance orientation) とした(仲間に入れるか、信用できるか、安全か、自己概念を維持できるか、といった不安)[Gudykunst, 1991]。

第二の知識とは、適切及びイフェクティブにコミュニケーションするのに必要な「こと」である。その「こと」を知るためのストラテジーをバーガー [Berger, 1979] の3つのストラテジー (passive, active, interactive) を使っている。さらに展開し、記述、選択的解釈、積極的情報収集、評価、摂取のそれぞれの段階を説明している。

第三の技能では、効果的及び適切にコミュニケーションするのに必要な技能は不確実性と不安を減少させる技能であるという観点から、次に示す概念でまとめている。不安の減少と抑制には、マインドフルネス (mindfulness)、曖昧なものに対する寛容さ (tolerance for ambiguity) が必要であるとしている。不確実性の減少には、感情移入 (empathy)、行動的フレキシビリティ (behavioral flexibility)、不確実性自体を減少させる能力 (reduction of uncertainty) が必要としている [Gudykunst, 1991]。

海外におけるその人の有効性、つまりその人の持つ異文化のコミュニケーション能力は、現地の人々との相互作用 (intercultural interaction)、職業的な能力、あるいは家族を含めた現地への適応 (personal/family adjustment) と表現されるが、文化や国により異なるアプローチを認めることができる。相手国の言語の理解や運用能力、あるいはコミュニケーションという点について、いくつかの現象を指摘することができる。つまりグディカンスト [Gudykunst, 1991] の枠組みでようやくバーガーら [Berger, 1979; Berger & Bradac, 1982; Berger & Calabrese, 1975] の不確実性を減少するための3つのストラテジーで情報を収集するという側面が入れられたのであって、一般的

にいてこれまでのアメリカの異文化コミュニケーション研究において現地の言語が重視されたことはあまりない。例えば、ルーベンとキーリー [Ruben & Kealey, 1979] の調査を参考に、日本人学生を対象にして、西田ひろ子 [Nishida, 1985, 1988] は同じ概念を調べた。その結果、未知の物事に対する忍耐、つまり曖昧さへの寛大さのみがカルチャー・ショックに関係があることが分かった。そして著者は次の3点を指摘している。

(1) コミュニケーション能力は、言語能力との関係において、論じるべきだ。

「感情移入能力」「敬意を表すことのできる能力」「相互作用の仕方」などは、共通言語の使用を前提にしているが、英語能力の低い日本人にとっては、英語でのこれらの能力の表現は、日本語ではできるが、英語ではできないのではないか。

(2) 非言語表現は、文化によって非常に異なる。例えば、話の始め方、終わり方、話の進め方、役割行動といったものは文化的影響が非常に高い。

(3) 異文化適応に必要なコミュニケーション能力は、状況によって異なる。例えば、滞在期間、滞在目的など。

この中で、コミュニケーション能力は、現地の言語、つまりこの場合は英語の能力との関係において論じなければならないとしている。また非言語能力も文化特有のものであるから、問題は文化学習か、相互作用か、ということになる。さらに、相互作用の生じる場の要素によって、コミュニケーション能力を分析したり、理解しなければならない、ということになる。

言語能力、あるいは言語的コミュニケーション能力ということについてはもう一面ある。アメリカ人に対する日本語知識のないことを批判する一方、日本人のアジア諸国の言語知識のないことやヨーロッパ諸国の言語知識のないことについては無関心でいる日本人がいる。また母国語でもない英語を共通語とってしまう傾向があったりする。もちろん言語の「力」という現実がそうさせているわけであるが、現地語を無視していることに他ならない。⁴⁾

異文化のコミュニケーション能力を論じる場合、状況的要素という問題を取り上げることも重要である。個人レベルの要素と状況的要素の相互作用とみる見方がある。例えば、一般的な人間関係において、3つの状況的要素が分析には重要である

と報告されているが、それらは、(1)親密性 (intimacy)、(2)可視性 (visibility)、(3)規制性 (regulation) である [Marwell & Hage, 1970]。4つの状況的要素を指摘した研究では、(1)競争的・敵対的・協調的・友好的 (competitive and hostile/cooperative and friendly)、(2)平等・不平等な力関係 (equal power/unequal power)、(3)真剣・表面的 (intense/superficial)、(4)人間関係 / 情緒的・フォーマル / 仕事中心的・フォーマル (socioemotional and formal/task-oriented and formal) が指摘されている [Wish, Deutsch, & Kaplan, 1976]。

異文化の分析においてもいくつかの状況的な要素が指摘されている。例えば、コーディとマクローリン [Cody & McLaughlin, 1985] は6つの状況的要素を分析に必要な要素としている。それらは、(1)親密性 (intimacy)、(2)友好性 (friendliness)、(3)快 (pleasantness) (評価)、(4)不安 (apprehension)、(5)かかわり合い (involvement)、(6)支配 (dominance) (力の均衡 vs 力の不均衡) である。これらは、異文化の状況においても、有効であることが確認されている [Brislin, 1981; Detweiler, Brislin, & McCormack, 1983]。さらに、異文化の研究において、ブリスリンら [Brislin, 1981; Detweiler, Brislin, & McCormack, 1983] は6つの状況的要素を発見している。それらは、(1)物理的環境 (physical environment)、(2)時間的束縛 (time constraints)、(3)個体化・無名化 (individuation/anonymity)、(4)超過労働・不足労働 (overworked/underworked)、(5)適所の存在・適所の不在 (presence/absence of a niche)、(6)その場の構成の度合、である。

ここでレビューした概念、及びフレームワークは異文化トレーニングにおいて開発・訓練しようとする能力を正確に理解し、それに基づく訓練の目的設定、訓練方法の選択、開発能力の測定を、一つの体系として捉えるうえで重要な議論になる。特に、異文化トレーニングがこれまで経験的に行われてきた側面が強ければ強いほど、この種の議論の必要性が認識されるべきであろう。

5 異文化のコミュニケーション能力の測定法

キムとグディカンストのフレームワーク及び構成概念を参考にして測定法を作成する [Kim, 1991; Gudykunst, 1991, 1993] が、前節の内容をまとめると次のようになる。キム [Kim, 1991] の3つの次元と概念構成は、(1) 知覚の次元、(2) 動機・態度の次元、(3) 行動の次元、の三つである。そして、知覚の次元には、知覚的複雑性、カテゴリー幅、知覚的融通性、パースペクティブ・テイキングがあり、動機・態度の次元には、適応的動機、積極的対人態度、曖昧さへの寛大さ、感情移入、感情移入的動機、心理的距離、グループ間不安、自民族中心主義、偏見、行動の次元には、行動的複雑性、行動的フレキシビリティ、コミュニケーション調整、メッセージ複雑性、人中心コミュニケーション、対人管理、相互作用深度、非評価的相互作用姿勢、自己中心役割行動、相互作用管理がある [Kim, 1991]。

グディカンスト [Gudykunst, 1991] はスピッツバーグとキューパック [Spitzberg & Cupach, 1984] のコミュニケーション能力に関する議論から3つの構成要素を用い異文化のコミュニケーション能力を論じている。その3つの構成要素は(1) 動機、(2) 知識、(3) スキルである。まず動機については、予測傾向、不安拡散回避傾向、自己概念維持傾向、情報への開放性傾向。知識については、情報収集知識、異文化知識、他言語知識、対人類似知識、多重解釈知識。そしてスキルについては、マインドフル能力、曖昧性寛容能力、不安管理能力、感情移入能力、行動取り入れ能力、予測能力であるとしている。

前節の文献研究とフレームワークのレビューに基づき測定法を作成する項目を提示する。これは試みであり、その信頼性については将来検討されなければならない。またここで作り上げる測定項目は異文化のコミュニケーション能力を測定するもので、それ以外の側面を対象としない。例えば、特定の個人が接する異文化の環境における全人的な能力の測定といった場合、この測定項目に加えて他の側面を測定するものを同時に使用しなければならないということである。

キムとグディカンストに共通する側面である動機、行動技能（スキル）を中心に、異文化のコミュニケーション能力を測定する概念をAからMまでの13とする構成にした。それに、それぞれの概念を測定する質問項目を作成した。これらの項目は、

グディカントが著書 Bridging Differences: Effective Intergroup Communication (First Ed., 1991)(Newbury Park, CA: Sage) で発表した内容をさらに第二版（現在印刷中であり、個人的に連絡し、前もってそれを郵便で受け取った）で充実させた項目を基にしている。グディカントは10の測定項目を作成しているが、ここでは日本文化及び日本人の行動を考慮して肯定的測定項目と、否定的項目をそれぞれ3つずつ提示する。

例えば、一つの測定法を作成するには、これらの項目から必要な肯定と、否定の項目を適宜選び、一つの項目に対して、5段階（内容に対して、自分は決してそうではないとき1、あまりそうではないとき2、そうである場合もあるが、そうでない場合もあるとき3、たいていそうであるとき4、いつもそうであるとき5に丸を付ける）で被験者が反応できるようにする。否定的な内容を表現した項目については、集計の際、5段階を逆にして合計を計算する。そうすることにより、得点ポイントが高ければ高いほど測定する概念に関する傾向が高いということになる。

1) 動機・態度

A) 否定的な結果を考えることから生じる不安 (Stephan and Stephan, 1985)

人とコミュニケーションするとき、私はリラックスしている

人とコミュニケーションするとき、私は落ち着いている

人とコミュニケーションするとき、私は苛立たない

人とコミュニケーションするとき、私はストレスを感じる

人とコミュニケーションするとき、私は不安を感じる

人とコミュニケーションするとき、私はいろいろ心配する

B) 相手の行動を予測できないことからくる不確実性 (Gudykunst, 1991)

人とコミュニケーションするとき、私は相手の行動を説明することができる

人とコミュニケーションするとき、私は相手の行動を理解することができる

人とコミュニケーションするとき、私は何をすればよいか知っている

人とコミュニケーションするとき、私は自信がない

人とコミュニケーションするとき、私はどう行動してよいか分からない

人とコミュニケーションするとき、私は相手の行動を予測することができない

C) 自己集団の基準でもって相手を判断する自民族中心的傾向 (Brewer, 1981)

私は文化背景の異なる人を信用することができる

私は文化背景の異なる人を恐れることはない

文化背景の異なる人を評価するとき、私は自己の価値基準は用いない

私は自分に似た人とつき合うことの方が好きだ

私は権威には従順である

私は文化背景の異なる人とは距離を持つとうとする

D) 相手の帰属に関する予断である偏見 (McConahay, 1986)

私は差別されている人々の怒りを理解できる

差別の問題は今日の問題の一つである

私は文化背景の異なる人々に対して肯定的な感情をもっている

私は雇用機会均等法は行き過ぎであると考え

差別を受けている人々がテレビなどで注目され過ぎている

差別を受けていると思われる人々は平等を主張し過ぎである

E) 文化背景の異なる相手への接近・回避傾向 (Sorrentino and Short, 1986)

私は文化背景の異なる人々と定期的に会う機会を持っている

文化背景の異なる人々と親しい関係を持つことは望ましいことである

私は文化背景の異なる人々との友人関係を深める努力をしている

私は文化背景の異なる人々とのコミュニケーションは避けられれば避ける

私は家族の一員が文化背景の異なる人と結婚することには反対する

文化背景の異なる人と接するとき、どう行動してよいか全く分からない

2) 知識

F) 新しいことや異質なことを積極的に取り入れる傾向である不確実性志向
(Hofman, 1985)

今まで行ったことのある所よりも、行ったことのない所へ行きたい
新しい情報を得たとき、すでに持っている情報に組み入れようとする
他の人と比較せずに、その人自身の価値で評価する

私は伝統的な考えを持っている

自分自身について、他の人と比較しない

私は自分に合わない考えは否定する

G) 異集団に関する知識 (Gudykunst, 1991) (実際の測定法では、() に特定の
異集団の名前を記入して用いる)

() の人々の習慣について知っている

() の人々のコミュニケーションのルールについて知っている

() の人々の話す言葉を私も使える

() の人々の間で行われる慰める行為はどうするのか知らない

() の人々の間で行われる説得の行為はどうするのか知らない

() の人々の間で行われる冗談はどう言うのか知らない

3) スキル

H) 新しいカテゴリーの創造、新しい情報の受容、複数の考え方の容認を意味するマインドフル (Langer, 1989)

コミュニケーションをするとき、私は場面や状況に注意を払う

私はコミュニケーションをする相手を詳しく描写することができる

私はコミュニケーションをする相手に関する知らない情報を探し出そうとする

コミュニケーションをする相手から受け取るメッセージで、食い違っているメッセージは無視する

私はコミュニケーションの結果を気にする

自分が理解されていないことを相手に伝えるのは難しい

I) 効果的な相互作用に必要な情報が不足している状況においてもうまく対処する能力である曖昧性に対する許容能力 (Gudykunst, 1991)

新しい状況に対応して自分を調整することは自分にとってやさしいことである

なじみのない状況でも私はリラックスしている

自分の行動を決める基準がはっきりしていない状況でも気楽にしていることができる

私は曖昧な状況では不安を感じる

私は自分が期待したようにことがはかどらない場合いらいる

自分の知らないうちに環境が変わってしまうと私は失望を感じる

J) 相手の体験を解釈をするとき相手の行動基準を用いる感情移入能力 (Gudykunst, 1991)

言われなくても、その人が感じていることを言い当てることができる

困っているとき、その人がいかに感じているかを想像することができる

その人の経験は、その人の立場から理解しようとする

コミュニケーションをするとき相手が何を考えているか分からない
相手が体験している気持ちというものを理解するのは非常に難しい
ある状況で私が感じる気持ちと同じものを他の人も体験する

K) 相手の行動に適応、順応させる行動の適応能力 (Lennox and Wolfe, 1984)

コミュニケーションをしている相手の行動に合わせる
相手に対して自分を表現する方法を調整することができる
知人と親しい友達では、違ったコミュニケーションのスタイルを用いる

私は誰に対しても同じ非言語コミュニケーション（ジェスチャーなど）を用いる
私は相手の話し方に合わせない
常に一つのコミュニケーションのスタイルを使う

L) 相手の行動予測と説明の能力 (Spitzberg and Cupach, 1984; Watzlawick, Bervin, and Jackson, 1967; J. H. Turner, 1987) (実際の測定法では、
() に特定の異集団の名前を記入して用いる)

- () から受け取るメッセージは正確に解釈することができる
- () の行動に関して正確に予測することができる
- () の行動を他の人に正確に説明することができる

互いに同意できない場合、() の行動を正確に予測することはできない

- () の態度や考え方を理解していない
- () の行動を理解しようとするとき、よく間違った解釈をしてしまう

M) 文化背景の異なる人とのコンフリクト管理能力 (Fisher and Brown, 1988)

いさかいを起こしている場合でも、その人を理解しようとする
人との対立をうまく処理しようとするとき、理性と感情のバランスをと
る

決定の結果、何らかの影響を及ぼすことになる人には前もって相談する
対立があるとき、自分に同意するように働きかける

人と対立しているとき、私はそんなに建設的ではない

人と対立しているとき、私は説得されることに寛大でない

註

1) 用語の問題を論じた部分は「国際化トレーニングの「適用」の問題」として『日本大学国際関係研究』国際関係編第11巻第1号(1992, pp. 139-155)に発表した内容に今回加筆訂正した。尚、異文化トレーニングの内容の問題については今回行った文献研究である。

2) 一つの次元、あるいは側面の構成概念として、発表してある場合は、概念を省略しないでそのまま残したが、本論文の概念の数には入れていない。この社会的リラクゼーションと他人指向という次元は M. ハマー [Hammer, 1989] が発表したものである。

3) この論文が発表された段階では、ブリスリン [Brislin, 1981] は各々の概念を分けて論じていないので、それらの総合としての6つの概念としてここでは扱うことにする。さらに性格 (trait) と社会技能 (social skill) を分けて論じているが、社会技能という観点からは、最近の別の論文 [西田司, 1990] で議論した関係上、より詳しいので、それを参考に概念を捨てることにする。

4) 本論文のテーマから外れるので、異文化コミュニケーションと言語に関しては別の論文で論じることにする。

<使用文献>

- Argyle, M. (1979). New developments in the analysis of social skills. In A. Wolfgang (Ed.), Nonverbal Behaviour. London: Academic Press.
- Benson, P. G. (1978). Measuring cross-cultural adjustment: The problem of criteria. International Journal of Intercultural Relations, 2, 21-37.
- Berger, C. R. (1979). Beyond initial interactions. In H. Giles & R. St. Clair (Eds.), Language and Social Psychology. Oxford, UK: Basil Blackwell.
- Berger, C. R., & Bradac, J. (1982). Language and Social Knowledge. London: Edward Arnold.
- Berger, C. R., & Calabrese, R. (1975). Some explorations in initial interactions and beyond: Toward a developmental theory of interpersonal communication. Human Communication Research, 1, 99-112.
- Brewer, M. B. (1981). Ethnocentrism and its role in interpersonal trust. In M. Brewer & B. Collins (Eds.), Scientific inquiry and the social sciences. San Francisco: Jossey-Bass.
- Brislin, R. (1981). Cross-cultural Encounters: Face-to-face Interaction. New York: Pergamon Press.
- Center for Research & Education (1973). Improving cross-cultural training and measurement of cross-cultural learning (Report of supplemental activities conducted under ACTION contract PC-72-42043, Vol. 1). Denver, CO: Author.
- Cody, M. J., & McLaughlin, M. L. (1985). The situation as a construct in interpersonal communication research. In M. L. Knapp & G. R. Miller (Eds.), Handbook of Interpersonal Communication(pp. 263-312). Beverly Hills, CA: Sage.
- Coker, D. A., & Burgoon, J. K. (1987). The nature of conversational involvement and nonverbal encoding patterns. Human Communication Research, 13, 463-494.
- Detweiler, R. A., Brislin, R. W., & McCormack, W. (1983). Situational analysis. In D. Landis & R. W. Brislin (Eds.), Handbook of Intercultural Training: Vol. 2. Issues in Training Methodology(pp. 100-123). New York: Pergamon.
- Dodd, C. H. (1987). Dynamics of Intercultural Communication. Dubuque, IA: William C. Brown.

- Fisher, R. , & Brown, S. (1988). Getting together: Building relationships as we negotiate. Boston: Houghton Mifflin.
- Furnham, A. , & Bochner, S. (1982). Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In S. Bochner (Eds.) Cultures in Contact (pp. 161-198). New York: Pergamon.
- Gudykunst, W. B. (1991). Bridging Differences: Effective Intergroup Communication. Newbury Park, CA: Sage.
- Gudykunst, W. B. , & Kim, Y. Y. (1984). Communicating with strangers: An Approach to Intercultural Communication. New York: Random House.
- Gudykunst, W. B. , Wiseman, R. L. , & Hammer, M. R. (1977). Determinants of a sojourner's attitudinal satisfaction: A path model. In B. Ruben (Ed.), Communication Yearbook (Vol. 1, pp. 415-425). New Brunswick, NJ: Transaction.
- Guthrie, G. M. , & Zektick, I. N. (1967). Predicting performance in the Peace Corps. Journal of Social Psychology, 71, 11-21.
- Hammer, M. R. (1987). Behavioral dimensions of intercultural effectiveness: A replication and extension. International Journal of Intercultural Relations, 11, 65-88.
- Hammer, M. R. (1989). Intercultural Communication Competence. In M. K. Asante & W. B. Gudykunst (Eds.), Handbook of International and Intercultural Communication. (pp. 247-260). Newbury Park, CA: Sage.
- Hammer, M. R. , Gudykunst, W. B. , & Wiseman, R. L. (1978). Dimensions of intercultural effectiveness: An exploratory study. International Journal of Intercultural Relations, 2, 382-392.
- Harris, J. (1973). A science of the South Pacific: An analysis of the character structure of the Peace Corp Volunteer. American Psychologist, 28, 232-247.
- ハリス, P. R. , & モーラン, R. T. (1983). 『異文化経営学』 (pp. 219-242) 興学社
- Hautaluoma, J. E. , & Kaman, V. (1975). Description of Peace Corps volunteer's experience in Afghanistan. In R. Brislin (Ed.), Topics in Culture Learning (Vol. 3, pp. 79-96). Honolulu, HI: East-West Center.
- Hawes, F. , & Kealey, D. J. (1979). Canadians in development: An empirical study of adaptation and effectiveness on overseas assignment. Ottawa: Canadian International

- Development Agency, Communication Branch Briefing Center.
- Hawes, F., & Kealey, D. J. (1981). An empirical study of Canadian technical assistance. International Journal of Intercultural Relations, 5, 239-258.
 - Heath, D. H. (1977). Maturity and Competence. New York: Gardner.
 - Hofman, T. (1985). Arabs and Jews, Blacks and Whites: Identity and group relations. Journal of Multilingual and Multicultural Development, 6, 217-237.
 - Hwang, J., Chase, L. J., & Kelly, C. W. (1980). An intercultural examination of communication competence. Communication, 9, 70-79.
 - 海外職業訓練協会 (1990). 『海外職業訓練』 No. 26.
 - Kim, Young Yun (1991). Intercultural communication competence: A systems-theoretic view. In S. Ting-Toomey & F. Korzenny (Eds.), Cross-Cultural Interpersonal Communication. (pp. 259-275). Beverly Hills, CA: Sage.
 - 国際産業経営情報センター (1989). 『国際人育成・派遣マニュアル』 産業労働出版協会, 10-237.
 - 近藤 裕 (1989) 『異文化適応講座』 (pp. 49-54) T B S ブリタニカ
 - Langer, E. (1989). Mindfulness. Reading, MA: Addison-Wesley.
 - Lennox, R., & Wolfe, R. (1984). Revision of the self-monitoring scale. Journal of Personality and Social Psychology, 46, 1349-1364.
 - Marwell, G., & Hage, J. (1970). The organization of role relationships: A systematic description. American Sociological Review, 35, 884-900.
 - McConahay, J. B. (1986). Modern racism, ambivalence, and the modern racism scale. In J. Dovidio & S. Gaertner (Eds.), Prejudice, discrimination, and racism. New York: Academic Press.
 - 水田園子 (1989). 「異文化トレーニング」西田、西田、津田、水田著『国際人間関係論』 聖文社, 234-259.
 - 日本在外企業協会 (1989). 『国際化要員研究委員会報告書』 日本在外企業協会, 33-41.
 - Nishida, H. (1985). Japanese intercultural communication competence and cross-cultural adjustment. International Journal of Intercultural Relations, 9, 247-269.
 - 西田ひろ子 (1988) 「異文化間コミュニケーション研究の現状と問題点」 辻村・

- 金編著『異文化との出会い』北樹出版, pp. 104-179.
- Nishida, T. (1983). The Japanese-American Communication Workshop. Nihon University Research Annual, 63-72.
 - 西田司 (1985). 「米国における文化間の人間関係トレーニングの歴史と理論的背景」『日本大学文理学部（三島）研究年報』第33集, 87-96.
 - 西田司 (1986a). 「米国における海外適応訓練の歴史とタイポロジーについて」『国際関係研究』第7巻, 第1号, 105-119.
 - 西田司 (1986b). 『異文化適応行動論』高文堂出版社
 - 西田司 (1987). 「コミュニケーションの概念とモデル」『国際関係研究』第7巻 第3号, 215-227.
 - 西田司 (1990). 「異文化への対応と社会技能」『日本大学国際関係学部研究年報』第11集, 41-51.
 - 西田司 (1992). 「異文化コミュニケーション能力」『日本大学国際関係学部研究年報』第13集, 87-97.
 - 西田司 & グダイカンスト, W. B. (1986). 「文化間の人間関係トレーニングの概念的モデル」『日本大学文理学部（三島）研究年報』第34集, 57-66.
 - Ruben, B. (1976). Assessing communication competency for international adaptation. Group and Organizational Studies, 1, 334-354.
 - Ruben, B. D. , & Kealey, D. J. (1979). Behavioral assessment of communication competency and the prediction of cross-cultural adaptation. International Journal of Intercultural Relations, 3, 15-48.
 - Sorrentino, R. M. , & Short, J. A. (1986). Uncertainty orientation, motivation, and cognition. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), Handbook of motivation and cognition. New York: Guilford.
 - Spitzberg, B. H. , & Cupach, W. R. (1984). Interpersonal Communication Competence. Beverly Hills: Sage.
 - Stephan, W. G. , & Stephan, C. W. (1985). Intergroup anxiety. Journal of Social Issues, 41, 157-166.
 - Turner, J. H. (1987). Toward a sociological theory of motivation. American Sociological Review, 52, 15-27.

- Watzlawick, P. , Beavin, J. H. , & Jackson, D. D. (1967). Pragmatics of Human Communication. New York: W. W. Norton.
- Wiemann, J. M. , & Backlund, P. (1980). Current theory and research in communicative competence. Review of Educational Research, 50, 185-199.
- Wish, M. , Deutsch, M. , & Kaplan, S. (1976). Perceived dimensions of interpersonal relations. Journal of Personality and Social Psychology, 33, 409-420.